

西表島の鳥類調査

与那城 義 春

(沖縄県立博物館)

はじめに

西表島は八重山郡竹富町に所属し、主島である石垣島のほぼ南西部に位置（図. 1）しており、島の面積は約284km²である。主島の石垣港から西表島の南東部周縁にある大原までの距離は約30kmである。西表島の大部分は山地によって占められており、最高峰の古見岳（標高・約470m）は島内の北東部に位置しているが、御座岳（約421m）は島の中央部から南部寄り、テドウ山（約442m）は北部寄りであり、祖納岳（約294m）は北西部に位置している。広大な山地の森林は常緑広葉樹等によって形成されており、山林地域には多数の渓流がある。

西表島の地層は六群に大別されており、特に砂岩・礫岩・シルト岩で構成されるほか、石炭も含む八重山層群（西表層）が広範囲に分布していると言われている。

沖縄県立博物館の主要事業である総合調査は、1998（平成10）年度から1999（平成11）年度にかけて八重山諸島竹富町の西表島で実施された。総合調査で自然分野の鳥類調査を実施したので、調査時に西表島で観察・記録されている鳥類の生息状況を報告する。

1. 調査地の概況

西表島の大部分を占めている山地には常緑広葉樹等の多様な植物群落によって広大な森林が発達している。この山林内に多数の渓流があり、大部分の河口域ではマングローブ林が形成されており、その付近の海岸にもマングローブが生育したりしている。

集落は海岸付近の平地部に在り、島内の東部から北部や北西部及び西部等にかけて散在している。

山麓や周辺の平地部には甘蔗畑やパイン畑、野菜畑、水田等の農地が在るほか、散在するススキ・チガヤ草原は牧場にも利用されている。

2. 調査方法

今回の調査は、鳥類の生息地を山林地域、草原地帯（甘蔗・野菜畑も含む）、水田地帯、集落地域、河口域マングローブ林、海岸地帯に大別して実施した。各調査地の中で河口域

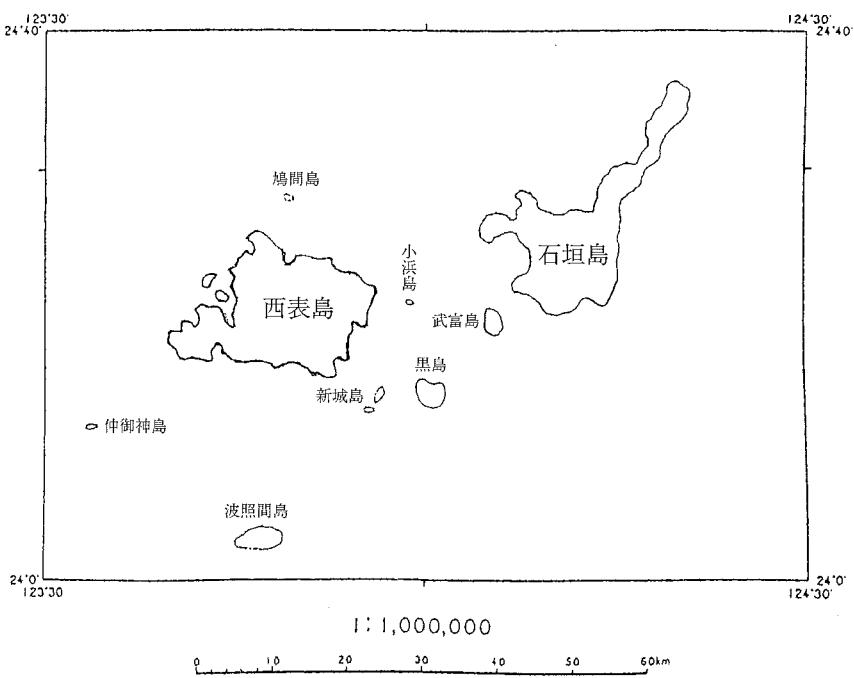


図1. 西表島の位置

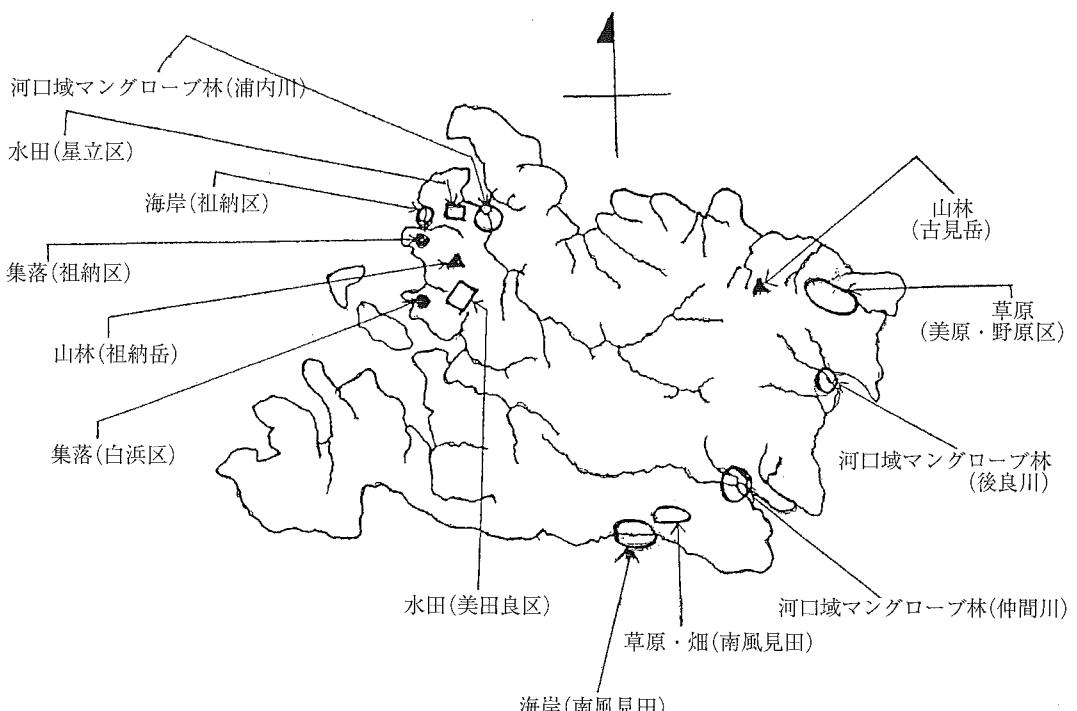


図2. 西表島の調査地点

マングローブ林の鳥類調査は定点センサス法を適用し、山林や草原、水田、集落地域、海岸の鳥類調査は各地域の状況に応じて可能な限り踏査した（図2）。

鳥種の識別は調査時に鳥体の目撃、鳴き声に基づいて実施したが、双眼鏡（8×30）も使用し、観察・確認した。

なお、鳥類の調査期日は下記の通りである。

1998（平成10）年11月24～26日。 2000（平成12）年3月1日～3日

3. 調査結果と考察

西表島の鳥類調査結果は表1に示されている通りであり、調査中に観察・確認されている鳥類は43種である。

表1より調査地別に見ると、山林地域（祖納岳、古見岳）では20種の鳥類が記録されている。その内訳を見ると、留鳥はズグロミゾゴイ、カンムリワシ、シロハラクイナ、キジバト、ズアカアオバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ、ハシブトガラスの12種である。これらの留鳥の中で、山林内の調査（約40分）で鳥体出現等による目撃頻度の多数記録された鳥類はヒヨドリ（20個体）、メジロ（11個体）、ハシブトガラス（9個体）の3種類である。コノハズク（3個体）は夜間調査の時に祖納岳の山麓地域の森林内でコホツ、コホツと鳴き声を出していた。その他の留鳥の中でズグロミゾゴイ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、シジュウカラの観察個体数は5種とも1個体の記録であった。通常、シロハラクイナの生息地は主に水田や河川及び、その付近の湿地草原等であるが、西表島には渓流が多いので山林地域にも本種が生息しているようである。

山林地域で観察された渡り鳥は、サシバ、チョウゲンボウ、キセキレイ、ジョウビタキ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、キマユムシクイの8種である。このうち、サシバとチョウゲンボウは山林の上空で鳴き声を出しながら飛翔中の各1個体及び林縁の樹木の先端部に止まっている両種の別個体も観察された。キセキレイ（1個体）は山林の明るい場所の地上で尾羽を上下に振りながら採餌しているが、時には飛翔して樹枝に止まることもあった。本種は秋冬期に県内の河口や海岸の干潟、水田等に生息するが、海岸付近や河川周辺の野菜畑等のほか、山林地域にも飛来して採餌する。ジョウビタキ（1個体）は林縁部の枯木の小枝で休息中のようなうであった。アカハラ（2個体）、シロハラ（11個体）、ツグミ（2個体）の3種は林床や林道で採餌したり、食餌を求めて林内を飛び回ったりしていた。キマユムシクイ（1個体）は林縁の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したりしていた。

草原地帯（甘蔗・野菜畑も含む）では18種の鳥類が観察・記録されており、その内で

表1. 鳥類の調査結果

○印：1998年11月22～24日の確認種／◎印：2000年3月1～3日の確認種

調査地 種名	山林地域	草原地帯 (野菜畑等も含む)	水田地帯	集落地域	河口域マン グローブ林	海岸地帯
カイツブリ					○	
ズグロミゾゴイ	○					
アマサギ		○ ○	○ ○		○	
ダイサギ		○ ○	○ ○		○	○
チュウサギ			○ ○		○	
コサギ		○	○ ○		○ ○	
アオサギ			○ ○		○	
クロサギ						○
ムラサキサギ		○	○		○	
カルガモ					○	
コガモ					○	
サシバ	○					
カンムリワシ	○ ○	○ ○	○	○		
チョウウゲンボウ	○ ○	○ ○	○ ○			
シロハラクイナ	○ ○		○ ○		○ ○	
バン			○ ○			
シロチドリ						○ ○
ムナグロ						○
アオアシシギ				○		
イソシギ						○
セイタカシギ				○		
ウミネコ						○
キジバト	○ ○	○	○	○ ○		
ズアカアオバト	○	○				
コノハズク	○				○	
ツバメ		○	○			
キセキレイ	○		○ ○	○		○ ○
ハクセキレイ		○ ○	○			
シロガシラ	○	○				
ヒヨドリ	○ ○	○		○ ○	○ ○	
ジョウビタキ	○					
イソヒヨドリ		○		○ ○		○ ○
クロウタドリ				○		
アカハラ	○	○	○	○		○
シロハラ	○ ○		○ ○	○	○	○
ツグミ	○	○ ○	○ ○	○		
ウグイス	○ ○			○ ○	○	
キマユムシクイ	○ ○					
セッカ		○	○			
シジュウカラ	○					
メジロ	○ ○	○		○ ○	○ ○	
スズメ				○ ○		
ハシブトガラス	○ ○	○		○ ○	○ ○	○ ○
計(43種)	20種	18種	20種	14種	15種	11種

留鳥が10種を占め、渡り鳥は8種である。10種の留鳥はムラサキサギ（1個体）、カンムリワシ（3個体）、キジバト（1個体）、ズアカアオバト（1個体）、シロガシラ（2個体）、ヒヨドリ（7個体）、イソヒヨドリ（2個体）、セッカ（2個体）、メジロ（5個体）、ハシブトガラス（3個体）である。このうち、セッカは草原・農耕地域等に周年生息・繁

殖している草原性の鳥類である。ムラサキサギは西表島や石垣島等で主に水田や河川等の湿地域に生息しており、イソヒヨドリは海岸地帯の留鳥であるが、両種とも単独で草原地帯に飛来して歩行しながら採餌していた。その他の留鳥でカンムリワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの7種は森林を主生息地にしているが、各種とも採餌するために森林から草原地帯に飛来するようである。カンムリワシは山林から頻繁に草原地帯にも飛来しており、付近の野菜畠内でノネズミ等を捕食していた。

草原地帯で観察されている渡り鳥は、アマサギ、ダイサギ、コサギ、チョウゲンボウ、ツバメ、ハクセキレイ、アカハラ、ツグミの8種である。このうち、アマサギ（20個体）、ダイサギ（1個体）、コサギ（3個体）、ハクセキレイ（12個体）、アカハラ（3個体）、及びツグミ（2個体）の6種は主にチガヤ群落の別々の場所で採餌していた。密生するチガヤ群落内で、アマサギとダイサギ、コサギの3種は混群を形成しており、その場所で各個体とも採餌していた。ハクセキレイ群はチガヤ群落の一部分を刈り取った場所にある凸凹状態の狭小な湿地で歩行しながら採餌していた。アカハラとツグミの2種はチガヤ群落の周縁部で各個体とも警戒行動を呈しながら別々に採餌していた。チョウゲンボウ（1個体）は草原付近の電柱に止まっており、時には草原の上空を飛翔しながら餌を探しているようであった。なお、草原地帯の上空ではツバメ（4個体）が縦横無尽に低空飛翔中であった。

水田地帯では20種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、シロハラクイナ、バン、キジバト、セッカの6種である。この中で、ムラサキサギ、シロハラクイナ、バンの3種は水田内の湿地で絶えず動き回って採餌している。カンムリワシとキジバトの2種は森林の鳥類であるが、カンムリワシは水田付近の電柱に止まって周辺を見回しており、獲物を探しているようであった。また、キジバト（3個体）は水田の畦道を歩きながら採餌していた。

セッカ（4個体）はイネの生育している水田の上空でヒッヒッヒッヒッ、チャチャッ、チャチャッ、チャチャッと鳴き声を出しながら飛翔していた。

水田地帯で観察・記録された渡り鳥は、サギ類5種（アマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギ）、シギ類2種（アオアシシギ、セイタカシギ）、セキレイ類2種（キセキレイ、ハクセキレイ）、ツグミ類3種（アカハラ、シロハラ、ツグミ）のほか、チョウゲンボウ、及びツバメを含めて14種である。このうち、水田内で冬鳥のアマサギ（27個体）、ダイサギ（5個体）、チュウサギ（2個体）、コサギ（7個体）、アオサギ（1個体）、アオアシシギ（1個体）、セイタカシギ（5個体）、キセキレイ（2個体）、ハクセキレイ（3個体）の9種が採餌していた。

水田の畦道で各個体とも適当な距離を保持しながら採餌したり、移動したりしているアカハラ（21個体）、シロハラ（2個体）、ツグミ（14個体）の3種は森林を主生息地にしている冬鳥である。水田付近の電柱の先端に冬鳥のチョウケンボウ（2個体）が止まっており、獲物を探しているようであった。水田地域の上空では旅鳥のツバメ群（12個体）が自由自在に飛翔していた。

今回、西表島の鳥類調査時に水田地域では14種類の渡り鳥が観察・記録されており、他の調査地域よりも渡り鳥は多種類を占めている。この水田地域の鳥類の中で、美田良区の水田地帯では渡り鳥のアマサギ群（27個体）とアカハラ群（21個体）の2種は他種の鳥類よりも多数個体を観察・記録した。しかし、西表島の水田地帯では調査中にコチドリやシロチドリ、ムナグロ等のチドリ類は各種とも観察・記録されなかった。

1996年1月下旬に沖縄県版RDBカテゴリー区分未決定種等・鳥類調査を西表島で実施した時、大原区の水田地帯ではサギ類（チュウサギ）、チドリ類（ケリ、タゲリの2種）、シギ類（イソシギ、クサシギ、セイタカシギの3種）が観察・記録された。ところが、現在（2000年）の同区水田地帯は草原地帯に変化しており、その大部分にはススキ群落等が高々と生育しているので、これらの鳥類は各種とも観察・確認されなかった。その付近の森林ではカンムリワシ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの留鳥は確認された。

集落地域（祖納区・星立区）では14種の鳥類が観察・記録されている。そのうちで、留鳥はカンムリワシ、キジバト、コノハズク、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの9種で大半を占めており、渡り鳥はキセキレイ、アカハラ、シロハラ、ツグミのほか、迷鳥のクロウタドリ（雄）を含めて5種である。

この集落地域の周辺には広大な山林が発達しているほか、海岸付近にはオオハマボウ・アダン群落やテリハボク、クロヨナ、アカギ等による樹林も形成されていた。大部分の住宅地の周縁にはフクギやガジュマル等の樹木が生育しているが、散在する空屋敷は野菜畑に利用されている場所もあった。

集落地域の9種の留鳥で、ヒヨドリ（9個体）、ウグイス（1個体）、メジロ（6個体）、スズメ（8個体）、ハシブトガラス（8個体）は屋敷内の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したり、鳴き声を出したりしていた。カンムリワシ（1個体）は主に集落地域の上空で飛翔しているが、住宅付近の電柱の先端部に止まることもあった。キジバト（2個体）は集落地域に散在する空屋敷内の狭い野菜畑で地上を歩行しながら採餌していた。イソヒヨドリ（雄・1個体）は屋根に飛来したり、電柱や電線に止まったりするが、時には芝生地域に下降して採餌したりしていた。コノハズクは夜間調査で住宅付近の大木でコホツ、コホツと鳴いている2個体を確認した。

通常、スズメは住宅付近に生息しているが、秋期から多数個体群で採餌するために水田

地帯や甘蔗畑等に飛来することもある。しかし、西表島のスズメは集落地域だけで観察されているが、付近の水田地域や別の調査地域では1個体も観察されなかった。

集落地域で観察された渡り鳥のうち、キセキレイ（1個体）とツグミ（1個体）の2種は空屋敷の野菜畑で適当な距離を保持して地上を歩行しながら採餌していた。アカハラ（12個体）とシロハラ（9個体）は公民館敷地内の芝生地域や住宅地付近の雑草地で採餌していた。迷鳥のクロウタドリ（雄・1個体）は海岸付近の空屋敷内で鳴き声も全然出さずに歩行しながら採餌していた。空屋敷の北部周辺と海岸との境界地域にはフクギ、テリハボク、ガジュマル等の大木、オオハマボウ、アダン等で群落が形成されていた。クロウタドリの採餌場所である空屋敷の地表面は多数の落ち葉で殆ど被覆されており、雑草のオニタビラコ、オオバコのほか、イネ科の草本類等も隨所に生育していた。そのような場所で単独のクロウタドリは警戒して歩行しながら採餌しているが、時には海岸側の樹木群落内に飛去したり、数分後には再度飛来して概ね同じ場所で採餌していた。

これまでに沖縄県内で迷鳥のクロウタドリ（ヒタキ科ツグミ亜科）は八重山諸島の与那国島（1982年）で2個体のほか、西表島でも観察・記録されている。

河口域マングローブ林では15種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はカイツブリ（2個体）、ムラサキサギ（1個体）、カルガモ（3個体）、シロハラクイナ（2個体）、ヒヨドリ（10個体）、ウグイス（4個体）、メジロ（6個体）、ハシブトガラス（4個体）の8種である。この中でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの4種は殆ど採餌するために付近の山林から各種毎に少数個体群や単独でマングローブ林に飛来しているはずである。カイツブリとカルガモの2種は水面を泳ぎ回りながら採餌していた。ムラサキサギとシロハラクイナの2種は湿地を歩行しながら採餌していた。

渡り鳥はアマサギ（4個体）、ダイサギ（2個体）、チュウサギ（1個体）、コサギ（1個体）、アオサギ（1個体）、コガモ（13個体）、及びシロハラ（1個体）を含めて7種である。これらの渡り鳥でアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギの5種はマングローブの散在する河口域の湿地で採餌していた。コガモ群は水面を泳ぎ回っており、時には水中に嘴を突っ込んだりする個体もいた。シロハラはマングローブ林縁の湿地で採餌していたが、数分後に別の場所に飛去してしまった。

1982年12月、西表島の河口域マングローブ林（後良川）で鳥類調査を定点センサス法で実施し、観察・記録された鳥類は31種であった。その中で留鳥は17種、渡り鳥は14種であり、今回の調査結果と比較して見ると、多種多様な鳥類がマングローブ林に飛来していると言える。多分、その頃のマングローブ林一帯は生息環境の良好な地域であり、留鳥や渡り鳥の各種鳥類によって採餌・休息場所や越冬場所等に利用されたのであろう。

沖縄本島北部の東村慶佐次マングローブ林の鳥類調査（1997年）で、付近の山林から

慶佐次川の河口域マングローブ林に飛来して採餌する多様な種類の留鳥が観察・確認されている。慶佐次川付近の山林から河口域マングローブ林内に飛来する留鳥の確認種はキジバト、ズアカアオバト、コゲラ、サンショウクイ、ヒヨドリ、ウグイス、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロおよびハシブトガラスを含めて10種である。その他の留鳥でクロサギは生息地の海岸から飛来しており、採餌した後で海岸に飛去した。カワセミの生息場所は河川流域や池沼周辺である。リュウキュウツバメは慶佐次川マングローブ林域の上空を飛翔している8個体の観察・記録である。

東村慶佐次川の河口域マングローブ林で渡り鳥の確認種はササゴイ、ダイサギ、ミサゴ、サシバ、シロチドリ、キアシシギ、イソシギ、ツバメ、キセキレイ、ハクセキレイ、シロハラ、キマユムシクイの12種である。

河口域マングローブ林に飛来する鳥類の確認種は、沖縄本島北部の東村慶佐次で25種、今回の西表島では15種の記録である。特に付近の山林から河口域マングローブ林に飛来する留鳥の確認種は、東村慶佐次では10種類だが、西表島では僅か4種である。

海岸地帯では11種の鳥類が観察・記録されている。その内訳を見ると、留鳥はクロサギ、イソヒヨドリ、ハシブトガラスの3種で、渡り鳥が大半を占めており、ダイサギ、シロチドリ、ムナグロ、イソシギ、ウミネコ、キセキレイ、アカハラ、シロハラの8種である。

3種の留鳥の中で、クロサギ（4個体）とイソヒヨドリ（3個体）の主生息地は海岸地帯であるが、イソヒヨドリは集落地域等にも飛来して採餌する。ハシブトガラス（3個体）は生息地の森林から海岸地帯に飛来し、砂浜で歩行しながら採餌していた。

渡り鳥の中で、海洋鳥のウミネコ（1個体）は集落付近の砂浜で歩行しながら採餌していた。また、シロチドリ（7個体）、ムナグロ（1個体）、イソシギ（2個体）の3種も砂浜で採餌したり、歩行したりしていた。

西表島の鳥類調査時にチドリ類は海岸で記録されているシロチドリとムナグロの2種だけであり、河口域や水田地帯及び別の調査地では全然どの種も観察されなかった。シギ類は海岸でイソシギ1種の記録であるが、水田地帯ではアオアシシギ、セイタカシギの2種が観察・記録された。

本調査は鳥類の生息環境を山林地域、草原地帯、水田地帯、集落地域、河口域マングローブ林、海岸地帯に大別して実施した。西表島の留鳥の中で、雑食性のハシブトガラスは水田地帯以外の生息環境の5区域で観察・確認されている。

野生生物種の多様性を保護するために、環境庁版（1991年）及び沖縄県版（1996年）の「絶滅のおそれのある野生生物・レッドデータブック」が作成されている。今回、西表島の鳥類調査で観察・記録された鳥類は43種であるが、そのうちで環境庁版と沖縄県版

のレッドデータブックでカテゴリー区分毎に掲載されている鳥類を以下に記述する。

国指定特別天然記念物のカンムリワシは環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで絶滅危惧種に認定されている。ズグロミゾゴイはレッドデーターブックの環境庁版では希少種に、沖縄県版では危急種に認定されている。渡り鳥のチュウサギ、セイタカシギ、留鳥のシロガシラの3種は環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで希少種に認定されている。留鳥のムラサキサギは沖縄県版レッドデーターブックで危急種に、留鳥のカツブリ、コノハズク、シジュウカラ、渡り鳥のシロチドリを含む4種は沖縄県版で希少種に認定されている。

西表島の鳥類調査中の記録種は下記の通りである。

調査期日：1998年11月22～24日、2000年3月1～3日

カツブリ科 PODICIPITIDAE	フクロウ科 STRIGIDAE
1. カツブリ <i>Podiceps ruficollis</i>	25. コノハズク <i>Otus scops</i>
サギ科 ARDEIDAE	リュウキュウコノハズク <i>Otus scops elegans</i>
2. ズグロミゾゴイ <i>Gorsakius melanolophus</i>	ツバメ科 HIRUNDINIDAE
3. アマサギ <i>Bubulcus ibis</i>	26. ツバメ <i>Hirundo rustica</i>
4. ダイサギ <i>Egretta alba</i>	セキレイ科 MOTACILLIDAE
5. チュウサギ <i>Egretta intermedia</i>	27. キセキレイ <i>Motacilla cinerea</i>
6. コサギ <i>Egretta garzetta</i>	28. ハクセキレイ <i>Motacilla alba</i>
7. クロサギ <i>Egretta sacra</i>	ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE
8. アオサギ <i>Ardea cinerea</i>	29. シロガシラ <i>Pycnonotus sinensis</i>
9. ムラサキサギ <i>Ardea purpurea</i>	30. ヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis</i>
ガンカモ科 ANATIDAE	イシガキヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis stejnegeri</i>
10. カルガモ <i>Anas poecilorhyncha</i>	ヒタキ科 MUSCICAPIDAE
11. コガモ <i>Anas crecca</i>	ツグミ亜科 TURDINAE
ワシタカ科 ACCIPITRIDAE	31. ジョウビタキ <i>Phoenicurus auroreus</i>
12. サシバ <i>Butastur indicus</i>	32. イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius</i>
13. カンムリワシ <i>Spilornis cheela</i>	33. クロウタドリ <i>Turdus merula</i>
ハヤブサ科 FALCONIDAE	34. アカハラ <i>Turdus chrysolaus</i>
14. チョウゲンボウ <i>Falco tinnunculus</i>	35. シロハラ <i>Turdus pallidus</i>
クイナ科 RALLIDAE	36. ツグミ <i>Turdus naumanni</i>
15. シロハラクイナ <i>Amaurornis phoenicurus</i>	ウグイス亜科 SYLVIINAE
16. バン <i>Gallinula chloropus</i>	37. ウグイス <i>Cettia diphone</i>
チドリ科 CHARADRIIDAE	38. キマユムシクイ <i>Phylloscopus inornatus</i>
17. シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus</i>	39. セッカ <i>Cisticola juncidis</i>
18. ムナグロ <i>Pluvialis dominica</i>	シジュウカラ科 PARIDAE
シギ科 SCOLOPACIDAE	40. シジュウカラ <i>Parus major</i>
19. アオアシシギ <i>Tringa nebularia</i>	メジロ科 ZOSTEROPIDAE
20. イソシギ <i>Tringa hypoleucus</i>	41. メジロ <i>Zosterops japonica</i>
セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE	ハタオリドリ科 PLOCIDAE
21. セイタカシギ <i>Himantopus himantopus</i>	42. スズメ <i>Passer montanus</i>
カモメ科 LARIDAE	カラス科 CORVIDAE
22. ウミネコ <i>Larus crassirostris</i>	43. ハシブトガラス <i>Corvus macrorhynchos</i>
ハト科 COLUMBIDAE	
23. キジバト <i>Streptopelia orientalis</i>	
24. ズアカアオバト <i>Sphenurus formosae</i>	

4. 要 約

1998（平成10）年度から1999（平成11）年度までの2年間、沖縄県立博物館の主要事業である総合調査が八重山郡竹富町所属の西表島で実施された。総合調査の自然分野で西表島の鳥類調査を実施し、観察・記録された鳥類は9目20科34属43種である。

本調査は鳥類の生息環境を山林地域、草原地帯、水田地帯、集落地域、河口域マングローブ林、海岸地帯に大別して実施した。河口域マングローブ林の鳥類調査は定点センサス法を適用し、その他の調査地では可能な限り踏査した。

山林地域で20種の鳥類が観察・記録されており、留鳥は12種、渡り鳥は8種である。12種の留鳥はズグロミゾゴイ、カンムリワシ、シロハラクイナ、キジバト、ズアカアオバト、コノハズク、シロガシラ、ヒヨドリ、ウグイス、シジュウカラ、メジロ及びハシブトガラスである。これらの留鳥のうちで、山林の調査中（約40分）に鳥体の目撃等で出現頻度の多数記録されている鳥類はヒヨドリ（20個体）、メジロ（11個体）、ハシブトガラス（9個体）の3種である。コノハズク（3個体）は夜間調査の時に祖納岳の山麓地域の森林内でコホツ、コホツと鳴き声を出していた。その他の留鳥で、ズグロミゾゴイ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、シジュウカラの観察個体数は5種とも1個体の記録であった。通常、シロハラクイナの生息地は主に水田や河川及び、その付近の湿地草原等であるが、西表島には溪流が多いので山林地域にも本種が生息しているようである。

山林地域で記録された8種の渡り鳥はサシバ、チョウゲンボウ、キセキレイ、ジョウビタキ、アカハラ、シロハラ、ツグミ、キマユムシクイである。これらの渡り鳥のうちで、サシバ（2個体）とチョウゲンボウ（2個体）は両種とも山林の上空で鳴き声を出しながら飛翔中の各1個体、及び林縁の樹木の先端部に止まっている両種の別個体も観察された。キセキレイ（1個体）は林内の明るい場所の地上で尾羽を上下に振りながら採餌しているが、時には飛翔して樹枝に止まることもあった。ジョウビタキ（雄・1個体）は林縁部の枯木の小枝で休息中のようにあった。アカハラ（2個体）、シロハラ（11個体）、ツグミ（2個体）の3種は林内の落ち葉の多い場所で頻繁に採餌したり、餌を求めて林内を飛び回っていた。

草原地帯（甘蔗畑・野菜畑も含む）で観察された鳥類は18種であり、留鳥は10種、渡り鳥は8種の記録である。10種の留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、セッカ、メジロ、ハシブトガラスである。このうち、セッカは草原や農耕地域等に周年生息・繁殖している草原地帯の鳥類である。ムラサキサギは主に水田や湿原、河川等に生息しているが、時には単独で草原地帯や付近の野菜畑等にも飛来して採餌する。イソヒヨドリは殆ど海岸地帯に生息しているが、草原地帯等にも単独で飛来して地上を歩行しながら採餌していた。その他の留鳥でカンム

リワシ、キジバト、ズアカアオバト、シロガシラ、ヒヨドリ、メジロ、ハシブトガラスの7種は森林地域を主生息地にしているが、各種とも草原地帯に飛来して随所で採餌していた。3個体のカンムリワシは林縁と草原地帯の上空を飛翔しながら旋回したりしているが、1個体の本種は草原付近の野菜畠内でノネズミ等を捕食していた。

草原地帯で記録されている8種の渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、コサギのほか、チョウゲンボウ、ツバメ、ハクセキレイ、アカハラ、ツグミである。このうち、サギ類の3種とハクセキレイ、アカハラ、ツグミはチガヤ群落の別々の場所で採餌していた。アカハラとツグミは採餌するために付近の森林から草原に飛来していると思われる。チョウゲンボウは草原周辺の電柱に止まっているが、時には草原の上空を飛翔することもあり、餌を探しているようであった。なお、草原地帯の上空ではツバメ（4個体）が絶えず縦横無尽に飛翔していた。

水田地帯では20種の鳥類が観察・記録されている。その内で、留鳥はムラサキサギ、カンムリワシ、シロハラクイナ、バン、キジバト、セッカの6種である。これらの留鳥の中でムラサキサギとシロハラクイナ、バンの3種は水田内の湿地を絶えず歩行しながら採餌していた。カンムリワシとキジバトの2種は森林を主生息地にしている鳥類であるが、カンムリワシは水田付近の電柱の先端部に止まって周辺を見回しており、餌を探しているようであった。キジバトは水田の畦道を歩行しながら採餌したりしていた。セッカはイネの生育している水田の上空でヒッヒッヒッヒッヒッ、チャチャツ、チャチャツ、と鳴きながら飛翔していた。

水田地帯で記録されている渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギの5種のほか、シギ類のアオアシシギ、セイタカシギの2種、セキレイ類のキセキレイ、ハクセキレイの2種、ツグミ類のアカハラ、シロハラ、ツグミの3種、及びチョウゲンボウ、ツバメの2種を含めて14種である。これらの渡り鳥の中で5種のサギ類と2種のシギ類及び2種のセキレイ類は水田内で歩行しながら採餌していた。アカハラ、シロハラ、ツグミの3種は水田の畦道で各個体とも適当な距離を保持して歩行しながら採餌しているが、このツグミ類は3種とも森林地域を主生息地にしている冬鳥である。水田付近の電柱の先端に冬鳥のチョウゲンボウが止まっているが、休息しながら獲物を探しているように思われた。水田地帯の上空ではツバメ群（12個体）が自由自在に低空飛翔中であった。

集落地域（祖納区・星立区）では14種の鳥類が観察・記録されている。その内で留鳥はカンムリワシ、キジバト、コノハズク、ヒヨドリ、イソヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの9種である。これらの留鳥の中でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、スズメ、ハシブトガラスの5種は屋敷内の樹枝から樹枝に移動しながら採餌したり、鳴き

声を出したりしていた。カンムリワシは集落地域の上空を飛翔しているが、時には住宅付近の電柱の先端部に止まることもあった。キジバトは集落地域に散在する空屋敷内の狭い野菜畠で地上を歩行しながら採餌していた。イソヒヨドリ（雄）は屋根に飛来したり、電柱や電線に止まったりするが、時には芝生地に下降して採餌したりしていた。集落地域のスズメ群（8個体）は電線や屋根のほか、住宅周辺のフクギ等の樹枝に止まったりしていた。通常、スズメは住宅地域に生息しているが、秋期から多数個体群で水田地帯や甘蔗畠等に飛来したりする。しかし、西表島のスズメは集落地域だけで記録されており、水田地帯のほか、別の調査地等では1個体も観察されなかった。コノハズクは夜間調査時に住宅付近の大木でコホッ、コホッと鳴いている2個体を確認した。

集落地域で観察・記録されている5種の渡り鳥のうち、キセキレイとツグミの2種は空屋敷の野菜畠で適当な距離を保持して地上を歩行しながら採餌していた。アカハラ群（12個体）とシロハラ群（9個体）は公民館敷地内や住宅付近の芝生地域で採餌していた。迷鳥のクロウタドリ（雄）は海岸付近の空屋敷内の地上で歩行しながら採餌していた。本種が採餌している空屋敷内の地面は多数の落ち葉で殆ど被覆されており、雑草のオニタビラコ、オオバコのほか、イネ科の草本類等も随所に生育していた。

河口域マングローブ林で観察・記録されている15種の鳥類のうち、留鳥はカイツブリ、ムラサキサギ、カルガモ、シロハラクイナ、ヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの8種である。これらの留鳥でヒヨドリ、ウグイス、メジロ、ハシブトガラスの4種はマングローブ林内で鳴き声を出しながら採餌しているが、ハシブトガラスは時々マングローブ林の上空でもカバー、カバーと鳴きながら飛翔する個体もいた。この4種の留鳥は殆ど採餌するために付近の山林からマングローブ林に飛来しているのであろう。カイツブリとカルガモの2種は水面を泳ぎ回りながら採餌しており、ムラサキサギとシロハラクイナは湿地を歩行しながら採餌していた。

河口域マングローブ林で観察・記録されている渡り鳥はサギ類のアマサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アオサギのほか、コガモ及びシロハラを含めて7種である。この渡り鳥の中で、5種のサギ類はマングローブの樹枝で休息していたが、1個体のダイサギが飛翔してマングローブの散在する湿地に下降すると、サギ類各種の全個体も休息している樹枝上から湿地に移動して採餌を始めた。コガモ群は水面を泳ぎ回っており、時には嘴を水中に突っ込んだりする個体もいた。シロハラはマングローブ林縁の湿地で採餌していたが、数分後に別の場所に飛去してしまった。

海岸地帯で観察・記録されている11種の鳥類のうち、留鳥はクロサギ、イソヒヨドリ、ハシブトガラスの3種、渡り鳥がダイサギ、コチドリ、ムナグロ、イソシギ、ウミネコ、キセキレイ、アカハラ及びシロハラを含めて8種であり、大半を占めている。留鳥の中

でクロサギとイソヒヨドリの主生息地は海岸地帯であるが、イソヒヨドリは採餌するために集落地域等にも飛来していた。ハシブトガラスは主生息地の山林から砂浜等にも飛来し、採餌していた。渡り鳥のダイサギ、コチドリ、ムナグロ、イソシギ、海洋鳥のウミネコ、キセキレイは集落地域付近の砂浜で歩行しながら採餌しており、アカハラとシロハラは森林付近の砂浜に生育しているグンバイヒルガオ群落内で採餌していた。

今回、西表島の鳥類調査で観察・記録された鳥類は43種であり、そのうちで環境庁版と沖縄県版のレッドデータブックでカテゴリー区分毎に掲載されている鳥類を以下に記述する。

国指定特別天然記念物のカンムリワシは環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで絶滅危惧種に認定されている。ズグロミゾゴイはレッドデーターブックの環境庁版では希少種に、沖縄県版では危急種に認定されている。渡り鳥のチュウサギ、セイタカシギ、留鳥のシロガシラの3種は環境庁版及び沖縄県版レッドデーターブックで希少種に認定されている。留鳥のムラサキサギは沖縄県版レッドデーターブックで危急種に、留鳥のカツブリ、コノハズク、シジュウカラ、渡り鳥のシロチドリを含む4種は沖縄県版で希少種に認定されている。

参考文献

- 日本鳥学会編, 1974. 日本鳥類目録. P.1~105. 学習研究社. 東京.
- 荒木裕・中川久夫, 1978. 琉球列島 西表島の地質. 琉球列島の地質学研究. 第3巻P.53~60. 琉球大学教養部地学研究室.
- 小林桂助, 1983. 原色日本鳥類図鑑. P.182~183. (株)保育社. 大坂.
- 与那城義春, 1986. 沖縄の野鳥観察. P.52~54. (株)新星図書出版. 沖縄.
- 環境庁自然保護局野生生物課編, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブック（脊椎動物編）. P.124~216. (財)日本野生生物研究センター. 東京.
- 日本鳥類保護連盟編, 1992. 鳥630図鑑. P.246. (財)日本鳥類保護連盟. 東京.
- 沖縄県環境保健部自然保護課, 1996. 沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータおきなわー. P.297~325. 沖縄県環境保健部自然保護課. 沖縄.
- 与那城義春, 1996. 沖縄県版RDB区分未決定種等調査報告書－鳥類－「沖縄県版レッドデータブック未決定種等調査報告書」. P.60~61. 沖縄県環境保健部自然保護課.